
Si je tombe dans l'amour avec vous

篠宮 かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i j e t o m b e d a n s l ' a m o u r a v e c
v o u s

【Nコード】

N 9 8 9 5 X

【作者名】

篠宮 かおる

【あらすじ】

他サイトに別名で掲載していた作品を、題名をフランス語にして、加筆修正をした物です。

夫は社長、妻は一般社員。

二人の関係は崩壊寸前。

「お願い、私を愛してるなら別れて・・・。」

不器用な夫婦のラブストーリー。

、 0 動き出した歯車。(前書き)

お引越し作業中です。

、0 動き出した歯車。

<愛してる>

そんな言葉は、私達夫婦の間には、最初から存在していない。

左薬指でさりげなく輝く指輪は、物言わぬ冷たい鎖。

その鎖に刻みこまれている言葉は、想いの籠っていない愛の言葉。

- - L' amour qui est destin? - -

真実味のない、当てつけの様な言葉。

日本語に訳せば>運命の恋<。

フランス語にしてあるのは、私に対する嫌味。

私、菜々宮^{ななみや}吉乃^{よしの}、26歳は、結婚して三年目の、どこにでもい
そうな普通の一般社員。

それに引き換え私の戸籍上の夫は、今、最も世間で話題の中心に
なっている若手実力派の社長。

見た目も然ることながら、言動から視線まで、全てが最高品質で、
文句のつけようのない所がまた逆に腹立たしい所。

鋭い眼は、常に私以外を見つめていて、微かに掠れ、良く響く甘
い声は、ベットの中で聞けば、程よい甘さを含む媚薬にも匹敵し、
魅了される。

そして、ガツシリしている割には、決して太っていない鍛え上げ
られた身体。

それで35歳となれば、玉の輿を狙っている女性社員にとっては、最高の獲物である事は間違いない。

きやあきやあと、やけに煩く、甲高い媚びた奇声をあげる先輩達を尻目に、私は与えられた仕事を全うしようと、美女の集団に囲まれている夫を見て見ぬふりをし、その横を堂々と通り過ぎた。

家では夫婦でも、一步でも家から出れば、その瞬間から私達は他人になる。

（まあ、家でも他人だけどね・・・？）

そんな事を思いながら、歩いていると、声を掛けられた。

「あら、菜々宮さん。アナタいつからそこにいたの？」
全然気付かなかったわ。

と、勝ち誇った笑みを浮かべ、小馬鹿にされ、蔑まれるけど、もうそんな程度の幼稚な虐めでは何とも思わないし、感じない。
逆に、そんな事しか出来ない人を憐れみたくもなる。

（どこがいいのよ、あの人の。）

でも、言い返し、反論するのも面倒だし、億劫。
なら。

「すみません・・・。」

小さく、怯えた声で謝り、頭を下げ、下に俯いて走り抜ける。
それが愉快だったのか、女性の甲高い声が聞こえた。

「アレでも同じ女かしら。見た？あの子、今日は化粧すらしてなかったわ。」

大袈裟に声をあげ、私をバカにし、優越感に浸っていた女性は、自分の隣に立っていた男性に甘えるように凭れ掛った。

その男性は、私が勤務している会社の現社長であり、戸籍上の私の夫である、綾橋^{あやはし} 智^{さとし}さん、35歳。

でも、胸は痛まない。

そんな光景に胸を痛めていた可愛い私は、結婚して2ヶ月目にして死んでしまった。

今では涙も出なければ、溜息さえ漏れない。

「吉乃、大丈夫か？顔色悪いぞ？」

出勤して早々、疲れ果てて頭を抱えていた私を気遣い、声をか掛けてくれたのは、同期で入社した営業部のエース・長瀬^{ながせ} 類^{るい}、28歳。

同期の誼で、私が営業部から総務部に異動した今でも、こうして仲良くしてくれている。

（いけない、今は会社なのに・・・。）

気付かれないように、そっと自然に笑顔を浮かべる。

「類は今日も、相変わらず朝から元気ね・・・？」

「まあ、営業は体が資本だからな。それより、本当に大丈夫か？お前また痩せたんじゃないのか？」

節だった指が、私の頬を滑っていく感覚が懐かしくて、不覚にも泣きそうになってしまった。

お互いが大切過ぎて、親友以上になれなかった私達。

後悔していないと言えば嘘になるけど、今の私は、昔の弱い私じゃない。

彼にも、彼の人生がある。

大きな手の平に手を絡めるように手を重ね、私はもう一度笑顔を浮かべた。

「大丈夫よ？私には愛する旦那様がいるから。類は知ってるでしょ？」

嘘。

愛なんかない。

だけど、類は優しいから、だから嘘を吐く。

あの人に対して抱いている感情があるとするのなら、それは深い深い諦めの様なもの。

愛しさもなければ、悲しさや憎さも感じない。

『無関心』と言う言葉が近いだろうか。

密やかな逢瀬を終えた私は、パソコンに向かい、ひたすらキーボードを叩くように弾く。

緩くウェーブが掛かっている柔らかめの長い髪が、他人の視線か

ら私の表情を覆う様に隠す。

さっき、類に「痩せたんじゃないか？」と、指摘された時は驚いて、一瞬、呼吸をするのを忘れてしまう位、驚いた。

確かに最近、私は最近痩せた。

でも、バレるとは思ってもなかった。

（あの人は気付かないのにな……。）

近しい人より、昔の想い人が私の変調に敏感なんて。

私が痩せる理由は拒食症気味による少食で、その拒食症気味の原因は、環境の変化によるストレスと、心因性のものだと病院で判断された。

私を担当してくれた先生は、そのストレスの原因を取り除かなければ、後々、私が悲しむ事になると、はっきり断言した。

そして最後に、精神科の先生も紹介してくれて、くれぐれも興奮しないようにと、注意した。

ふと、顔を上げ、何気なく辺りを見回した私は、見たくもない光景を目にしてしまい、無意識の内に唇から血が出るほど、強く噛み締めていた。

（ああ、やっぱり。結婚なんてしなければよかった。）

私が偶然にも見てしまったモノは、戸籍上の夫が、綺麗で、魅力的な女性とキスしている所だった。

結婚して、今年の10月で三年。

それは結婚した時から、僅かに軋み、隙間だらけだった私達夫婦の擦れ違う歪んだ関係が、いよいよ変化する刻^{とき}を悟り、今にも大きく動きだそうとする瞬間でもあった。

、1 亀裂と発症（前書き）

この話から色々手直しが入ります。

、1 亀裂と発症

涙は三年前に枯れ果てたのだと、ずっと思いこんできた。けれどそれは私の単なる思い込みだったらしい。

両頬に静かに伝わる、熱くも冷たい心の雫は、止まる事を忘れたかのようにずっと流れ続けれている。

（何を泣く必要があるの・・・。）

寝室は結婚して三ヶ月目に別々となり、夫婦として身体を重ね合わせた記憶も一度としてない。

なのに私は今、それを悔しく、惨めに感じている。

昨日、あの後、私は正午までに仕事を何とか予定通りにこなし、早退し、病院を受診した。

その病院は、昨年の秋から定期的に受診している所で、受診したのは精神内科。

私が診察室に入った瞬間、私を担当してくれている先生は、厳しい声で「やめなさい」と言葉を発した。

私には、先生がどうしてそんな事を言うのか判らなかった。

先生はそんな私の心理状況もお見通しだったのか、静に囁くように言葉を発した。

最近、泣いた記憶は？と。

私は首を横に振り、覚えてないと答えを返した。

先生は痛ましげな表情を浮かべながらも、最近あった事を事細か

く聞いてきた。

これも治療の一環だからと、辛くても話してくれるね、と、言われれば、私は望まれるがままに話した。

そして、ついさつき職場で見たことも、ありのまま淡々と話せば、先生は大きな溜息を吐いて、それが原因か、と、本当に小さく呟いて、私に聞いてきた。

「旦那さんとは別れられない？」

別れられなければ、近い内に確実に倒れると言われた私は、それでも別れられないと、無意識に答えていた。

一夜明け、目覚めた今、その理由が解った気がした。

いくら口先で愛がないと言っていたとしても、私はいつか。

（ああ、私って何処まで救いようがないの・・・。）

そう。

心の中ではいつも、いつか、きっと、と、思い、願っていたのかも知れない。

でも、それももうそろそろ限界。
心が、身体が、そして何より私自身が、声無き悲鳴を上げ、今にも狂ってしまいそうだった。

ベッドから降り、姿鏡の前に立つ。

鏡の中には、女性らしさの一欠片もない、貧相な身体つきの私がいた。

「吉乃、貴女、どうしたいの・・・？」

鏡の中の私は弱々しく、誰だって抱きたくない、鶏ガラより粗末な女にしか見えなかった。

鏡の中にいる私自身に声をかけても、答えが返ってくる訳でもないのに、それでも私は答えが欲しい為、自問自答を繰り返す。

（とりあえず、食事作らなきゃね・・・。）

そう思いながら、着替える。

その着替えている時でさえ、私の頭の中は、暗い思いと考えが常に支配している。

今の生活を捨てるのは簡単。

でも、その後の私の生活は？

不況な世の中のこのご時世、再就職なんて簡単に出来ない。

離婚だって、離婚後の住居や仕事、住み易い環境を整えてからの方が良いに決まっている。

大きめなトレーナーをクローゼットから出し、ジーンズと合わせれば、身体の線は簡単に隠せる。

長い髪は適当にアップし、バレッタで留める。

そのバレッタは、結婚が決まったお祝に、と、類が、特別にオーダーメイドしてまで、注文買い取りし、贈ってくれたモノで、一番気に入ってるモノ。

最後に、指輪をつけようと、ジュエリーボックスに手を伸ばし掛け、やめる。

（心もないのに、わざわざ自分から鎖をつけてどうするの・・・）

自分の愚かさや滑稽さに吐き気がする。

そんな気分をなんとか押し殺し、ガチャリと、寝室からリビングへと通じる扉を開くと、そこにはもう笑うしかない光景が、今や遅しと、私を待ち受けていた。

「お邪魔したみたいですね。どうぞ、私の事はお気になさらないで下さい。」

如何にもこれからという場面に出くわしてしまった私は、喚く事より、微笑を浮かべ、黙認する事を選んだ。

指輪をしていないだけで、私はひどく精神的に楽だった。

（最初から、こうしていれば良かったんだわ。）

現に、名前だけの偽りの夫に睨まれている今も、全然怖くもなければ、悲しくて辛くもない。

自分でも気付かない内に、自然と笑みが浮かんでくる。

「吉乃・・・？」

その笑顔の意味が解らなかったのか、名前だけの夫・智が、苛立った表情から困惑した表情で、私を見つめ、自分の身体にしな垂れ掛っていた妖艶な美女を引き剥がし、私と正面から向き合った。

そして、ゆつくりと伸ばされてきた手を、私は大きな音を立て、打ち払っていた。

「私に触らないで!!」

叫んだ瞬間、目眩が私を襲った。

(・・・っ、こんな時に・・・。)

だけど私はその襲ってきた突然の目眩を、気力と興奮から無視し、近くにあったガラスのフォトフレームを掴み、智に投げつけた。

投げつけたフォトフレームには、私と智のウェディング姿の写真が収まっていた。

粉々に砕け散ったフォトフレームは、私達夫婦の関係の様だった。

最初から解っていた。

私達夫婦の間に、『愛』などと言う、愚かで、甘い感情がないことなど。

(なのに、なのに・・・っ。)

結婚して二ヶ月位までは、確かに恋はしていた。

ただし、それは恋に恋にしていただけ。

荒れ狂う心を抑える為、私は自分自身に暗示をかける。

私が恋していたのは、幻で、類だけ。

この人になんて、恋なんかしてない。

(そうよ、恋なんてしてない。)

「ああ、何よ。その目は。貴方はいつもそう。私をいつもそうやってバカにして！！気に食わなかったのよ・・・っ。」

貴方の顔が、と、続く筈だった私の言葉は、無理して抑えつけていた強烈な発作により、声にならなかった。

胸を掻き毟るほどに、辛く、息苦しい発作は、私の身体からの命がけのSOS。

両膝をリビングの床につけ、右手で身体を支え、左手で胸元を押さえる。

（ああ、だからだったのね。）

決して興奮してはならないと言われ続けた意味が、今、初めて解った気がする。

死にたくないのに、死神の甘美な囁きが私を誘い、私はその囁きに誘われるがまま、意識を手放した。

、1 亀裂と発症（後書き）

一端、区切ります。

、2 キス（前書き）

短いですが、更新。

、2 キス

まだ、ダメよ……。

まだこちらに来てはダメよ……。

私の愛しい……。

生と死の空間で彷徨っていた私を現実に連れ戻してくれたのは、どこかやさしく、慈愛に満ちた知らない声と、頬に感じた痛みだった。

その頬の痛みを目を開くと、そこには何故かアノ人達がいた。

(ど、どうして、いるのよ!!)

いたのは、菜々宮の母と姉。

「吉乃……？ 吉乃!! 良かった。あなた、智さん、吉乃が目醒了ましましたわ。」

恐怖で凍りついた私の身体を、母は涙で潤んだ瞳を細め、嬉しげに微笑んで見せ、私の身体を起こし、ベットも起こし、甲斐甲斐しく世話を焼いた。

傍から見れば、美しい家族愛に見えるこの光景。

私はその光景を守る為に、固まった表情筋を動かし、微笑んで見せた。

「お母さん、私、少し寝過ぎちゃった?」

掠れた小さな声は、母と姉の気に召さなかった様だった。

「吉乃、アンタ憶えてないの？アンタはね、過労で倒れたのよ。智さんが病院に連れてきてくれなかったら、危なかったのよ！？」

姉は私の胸元を、ぐっ、と、力を込め驚掴み、揺さぶった。

「い、痛いよ、翠ねえ。分かったから放してよ。」

いつもこうだ。

諦めながら、抵抗しつつもそのまま揺さぶられていた私は、逸らした視線の先で、初めて戸籍上の夫と目があつた。

智は何故か酷く憔悴していて、私が自分を見ている事に気付くと、顔を歪め、手を伸ばしてきた。

後から思いだせば、私はこの時初めて、智の顔を見たと思う。

不安そうに歪められた顔は、確かに私を案じていてくれた。

静に、ねっとり絡み合う視線。

結婚して、恐らく初めて絡み合った視線。

そしてそれは、私に戸惑いと熱を生じさせた。

「あれ？吉乃、アンタ熱でもあるの？顔が真っ赤よ？」

「ふえっ！？」

（そ、そんな・・・。）

私は姉の言葉を否定しながら、まるで智の視線から逃げるかのように布団を被った。

だけど、病院の布団は薄くて頼りない。

私はいとも容易く姉に布団を捲られ、姉を恨んだ。

返して、と、繋がる筈だった言葉は、あっさりと固まってしまった。

（どうして、キスされてるの！？）

すっかり混乱してしまっていた私は、抵抗す事さえ忘れ、智から与えられた、熱く、性急なキスに溺れ、気がついた時には胸元が肌蹴られ、ベットの上で羞恥に悶えていた。

キスに溺れながらも、それとなく家族の姿を探したけど、家族の姿は既になく、病室には私の乱れた吐息だけが甘く響く。

「ん・・・、やつ・・・。」

思考がついていかない。

首筋に感じた痛みと、ちゅっと、濡れた音で、更に何も考えられなくなった。

「吉乃、吉乃・・・っ。」

フロントホックのブラジャーに、大きな手が掛かった時、甘く、
乱れた空気を邪魔するかのよう、病院に一人の女性が現れた。

「智さん、迎えに来ちゃった。」

艶やかで、自信に満ちた、私とは正反対の魅力的な女性の登場で、
私は瞬時に正気に立ち返っていた。

乱された病衣を手早く直し、ベットから降りる。

淫らなこの身体が、堪らなく嫌だった。

「ちょっとトイレに行ってきます。」

「吉乃、戻ってこいよ?」

「・・・・・・・・・・。」

（アナタは何処まで私を苦しめるの・・・?）

私が返事をしない事に、何かを察知したのか、智は私と目を合せ、
念を押すように「行ってこい」と言いながら、肩を軽く叩いた。

病室から出た私は、当てもなく院内を歩いた。

（どうして抵抗しなかったの?）

答えなら解っていた。

だけど、考えずにはいられなかった。

歩きながら考えているのは、つい先程までの事。

キスされた瞬間は驚きで、段々と深くなっていくキスは、女としての本能が働いてしまったのか、浅ましくも止められなかった。

抵抗できなかったのは嬉しかったから。

（なんだ、嬉しかったの？私は。あんなに嫌だったのに・・・、あんなに・・・。）

報われない恋はしないと、あの時に誓っていたというのに。

自分で自分が情けなくなってくる。

ぼろぼろと勝手に溢れてくる涙で、前が見えなくなってきた私に、神様は私に更なる試練を科そうとしていた。

だからだろうか。

私が気付かない内に智につけられ、首筋に咲いた紅い花は、励ますかのように中々消えなかった。

、3 宣告

泣くだけ泣いて、そのせいで腫れてしまった瞼。

こうして泣いている間にも、運命の時は静に迫っていた。

泣いている間、無意識の内に歩き回っていたせいか、私に宛がわれた病室までは、随分と距離があった。

ふらふらと病室まで歩いていた私は、寒気を覚えて立ち止まった。その時。

「菜々宮さん、丁度良かった。少し良いですか？」

「どうしたんですか？加賀見先生。」

私を呼び止めたのは、私の担当医の加賀見先生だった。その加賀見先生に、いつになく真剣な瞳で見つめられ、嫌な予感がした。

「ここじゃ、ちょっと……。」

案の定、加賀見先生は私の顔を見て、気まづげに顔を歪め、逸らした。

（いや、いやよ……。）

ついていけば、嫌な事を告げられる。

頭では分かっているのに、足が勝手に動く。

加賀見先生はまだ若いながらも、名医として有名で、彼の手に掛かれれば、どんな患者も明るくなると。

だけどそんな加賀見先生でも、時には残酷な宣言をしなければならぬ時だってある。

それがたまたま。

そう、偶然だっただけ。

その残酷な宣告を受ける患者が、私だったと言っただけ。

加賀見先生に連れて来られた所は、小さな誰もいない部屋だった。

備え付けのソファ―に座る様に促され座った私に、加賀見先生は憐みの籠った瞳と口調で話し始めた。

「悪かったね。でも、菜々宮さんは家族には知られなくなかっただらうから。」

これから話す事は、全部菜々宮さんの為だからね？

微笑んでいたつもりだったのかも知れない。

だけど、先生は涙を流していた。

「菜々宮さんは、俺が今まで診てきた患者さんの中で、一番強くてか弱い女性だね。それは精神面だけじゃなくて、身体の方もそうだ

った。」

先生が淹れてくれたホットココアの湯気が、私を慰めるかのように優しく揺れる。

「菜々宮さん、正直に言うと、このままでは君には妊娠は無理だ。妊娠しても子供は胎内で充分に育たないし、それ以前に妊娠する確率は、今は限りなく0%に近い。」

「・・・・・・・・。」

（う・・・そ・・・、よ・・・。そんなのウソ。）

「例え不妊治療をしたとしても、君の身体はもたない。」

口では待って、と、言っている筈だった。

だけど、実際はガタガタと震えているだけだった。

（聴きたくない、聴きたくない！！）

恐怖で震えているのに、それでも加賀見先生は、神様は、情け容赦がなかった。

「菜々宮さん、君はスキルス胃癌の可能性があるそうだ。もしそうなれば、余命はもって一年、早くて半年だ。」

スキルス胃癌・・・。

それはとてつもなく進行の早い、救いようのない死に直結する様

な病。

嘘だと、夢だと叫びたかったし、言つて欲しかった。

だけど両目から溢れ出す熱い涙が、現実だと私に知らしめる。

「治療は出来る限り手を尽くすけど、この手の病を克服する事はまず難しい。一度、精密検査をしてみないと・・・。」

加賀見先生の声は聞こえなかった。

「・・・っ、先生っ、時間を・・・っ、考える時間を、私に下さい・・・。」

やつとの事で絞り出した声は、絶望の色に染まっていた。
それほどまで、私は追い込まれていた。

（我ながら、なんて醜いのかしら・・・。）

死にたくないと思うのはどうしてだろう。

その時、私の頭に浮かんだのは、あの人の顔だった。

（どうして・・・。）

それを否定したくて、認めたくなくて、そして泣きたくなくて、私はその人の顔を頭から追い払う様に、頭を左右に振り、ソファーから立ちあがった。

「先生、この事は、絶対に何がなんでも、誰にも言わないでお願い下さい。」

「菜々宮さん、もしかして、君は、旦那さんと……。」

この人はなんて聡いのだろう。

「ええ。別れるつもりですから……。綾橋には他言無用にお願いします。」

つくづく、私は幸せに縁がないらしい。

加賀見先生は私の暗い笑みを見て、本当に無念そうに、ギョツと目を閉じた。

私が時間が欲しいと言ったのは、未練を断ち切る為であり、心の整理をする為。

「先生？私はね、菜々宮の人間でもないんですよ……。？アノ人達は、私が気付いてないと思ってるんです。」

バカみたいでしょ？

スツと、立ち上がった私が、家族の話をした理由を悟ると、先生は更に悲壮な表情を浮かべ、「解った」とただ一言だけ呟き、そのまま黙り込んだ。

少しだけ出歩いただけだった筈が、思わぬ話のせいで、私は夕方になるまで小部屋でばんやりしていた。

余命を宣告され、家族の話をした後、直ぐに立ち去るつもりだったから、私はずつと立ち尽くしたままだったけど、加賀見先生は、回診に行ったのか、既にいなくなっていた。

どのくらいの間そうしていただろう。

コンコン、と、響くノックの音に、私は小部屋の時計を見て驚いた。

時刻は18時を過ぎ、夕食の時間だった。

「菜々宮さん、夕飯の時間ですよ?。」

ノックの主は、綺麗で健康そうな看護師だった。

「すみません、今すぐ戻ります。」

「そうなさって下さい。ご家族の方が心配なさってますよ?」

（家族・・・?）

家族って誰の事?

ああ、そうか。

看護師の言葉に、フフと、暗い笑みを漏らした私は、心配して捜しに来てくれた看護師を促し、一緒に部屋へと戻り、偽りの笑顔

を浮かべた。

病室にいたのは、想像していた通りの人達だった。

血の一滴の繋がっていない姉に、偽りの両親。そして、姉の優しい旦那様。

（そう言えばこの人は、区役所に勤めていたような・・・。）

「なに？吉乃ちゃん。僕の顔に何かついてる？それとも好きになっちゃった？」

私が顔を黙って見ていた事に何を思ったのか、姉の旦那はふざけた様な事を言った。

いつもならその程度の冗談は、笑いながら流していたけど、今日はダメだった。

今日は疎ましく、そして腹立たしい。

「寝言は寝てからにして下さい。貴方は菜々宮家の婿なんですよ。それを自覚してらっしゃるんですか？」

一度決壊した思いは止まらない。

自分でもらしくないと思いつつ、辛辣な言葉を止める事は出来なかった。

「帰って。二度と姿を見せないで。あなた達の顔を見るだけで、お

かしくなるのよ！！今日限りで縁を切って！！」

奇しくも、それは初めてあの人達に対する反抗だった。

看護師を証人にして、夕飯のお盆を激情のままひっくり返し、酷い人格を見せつけた私は、布団を被って丸くなった。

暗闇は私を守ってくれる。

家族から伝わってくるのは、憤りと苛立ち、そして、表向きの感情である戸惑いだけ。

看護師は加賀見先生から私の事情を聴いていたのだろう。

ひっくり返された食事を片付けながら、事務的な口調でアノ人達に帰る様に促した。

「お引き取り下さい。これ以上興奮させられるとこちらが困りますので。」

「私達は家族なんですよ！？」

……ドクリツ……。

心臓が嫌な言葉を聴き、悲鳴を上げる。

（助けて……、助けて……。）

「お引き取り下さい！！警備員を呼びますよ。」

恐怖で怯えていたその時、力強い牽制の声が響いた。

その力強い声は、私を必死に守ろうとしているのか、決して揺るがなかった。

幸い、私の病室は個室だった為、他の人達に迷惑をかける事はなかった。

看護師とアノ人達の互いに譲らぬ問答は、私の担当医の加賀見先生の登場によつて、あっけなく終わりを迎えた。

加賀見先生は、布団を被っている私の頭を優しく撫で、静に微笑む気配がした。

「お嬢さんは明日には退院なさいます。そうですね、吉乃さん。」

その言葉には幾つもの含みがあった事は、その時は、私と加賀見先生、そして、その場にいた看護師にしか解らなかった。

、4 距離（前書き）

暗いです。ひたすら暗いです。

、4 距離

（神様、アナタは意地悪ですね……。）

退院した私を待っていたのは、以前の生活となら変わり映えない毎日と環境で、相変わらず私は一般社員で、あの人は社長で、たとえ会社ですれ違ったとしても、他人のフリ。

偶然二人つきりになっても、甘い雰囲気にはならない。

けど、今の私には皮肉だけれど、それが逆にありがたい。

きつと今以上の関係になってしまったら、私は死ぬのが怖くなる。

もう一度、愛などと言う愚かで醜悪な感情を知らない人形になってしまえば、辛くはない筈。

（大丈夫、大丈夫。私は大丈夫。愛なんて、知らない……。）

「吉乃、大丈夫か？なんかおかしいぞ？」

鬱々と、自分の思考の淵に沈んでいた私は、心配して私に声をかけてきてくれた類の言葉に、「そんな事ないわよ」と、言いたかったのに、あまりの不安定さに、つい本音を口にしてしまっていた。

「ねえ、類。私達、なんで別れちゃったのかな……。恋人じゃなかったけど、付き合ってたのに、約束までしてたのにね……。」

ごくりッ

類が息を呑むのが判った。

（ごめんね、類。）

人生をやり直せるのなら、やり直したい。

でも、ゲームじゃないんだから、それは叶わない。

悲しみと絶望にも似た、鬱々とした思考に沈んでいた私を、現実
に引き戻してくれたのは懐かしい香りだった。

「なら、なら、やり直すか？お前さえ望めば、いつだって俺はお前
を受け入れてやる余裕はある。俺だって、好きで別れた訳じゃない。
けどな、お前はアイツと別れられるのか？」

誰もいない休憩室。

ほのかに香る煙草の匂い。

たったそれだけなのに、私は昔を鮮明に思い出した。

初めてキスした日、映画を見に行った日、照れながら、二人つき
りで永遠を誓った日。

「るい、るいつ、類っ！！」

「吉乃、やめろ！！唇が切れるぞ。何かあったんだろ？ほら、話し
てみる。誰にも言わないから。」

唇を噛み、類に抱きつき我慢していた私を、類は呆気なく見破り、
優しく背中を撫でてくれた。

「昼休みもそろそろ終わっちゃうな。よし。久しぶりにあそこに飲みに行くか？」

類は意見を聴いているようで、実際は類の中では店に行く事は決定事項。

そんな些細な懐かしさも相まって、私は自然と頷き、約束のキスを交わした。

そこに、なんら罪悪感は感じていなかった。

仕事を定時に終わらせ、久しぶりに行った店は、あの頃と何も変わってなかった。

唯一変わったところと言えば、毎日口喧嘩をしていたオーナーと、バイトの女の子が結婚して、可愛い子供がいた事。

「あゝっ！！吉乃さん、久っしぶりいゝ！！元気だった？」

「おい、仕事しないんだったら帰れ。冬子^{とっし}」

「はっ？ざけんな。このクソ野郎。アタシは吉乃さんに逢いに来ただよっ！！」

そう言いながら、頬を真っ赤に染める冬子ちゃん。

（素直じゃないけど、可愛い。）

吊り目で、私より6歳年下の冬子ちゃんは、喧嘩腰な口調で言い

返ししながら、大きなタッパをカウンターテーブルに置いた。

多分、オーナーの為に作った夕飯だろう。

きつと、オーナーはなんだかんだ言いながら、それを食べると思う。

それは、私と智ではありえない関係。

「まあまあ、冬子ちゃん、落ち着いて？オーナーは冬子ちゃんが大切なよ、判ってあげて？」

「だな。コイツの愛情表現は、冬子ちゃん限定で無愛想なんだよ。愛されてるな？冬子ちゃん。」

私と類にフォローされた冬子ちゃんは、不平不満をぶつぶつ並べ立てながらも、満更でもなさそうに笑みを浮かべた。

カラント・・・。

グラスの中の氷が、音を立て奏で溶け、自身の存在をアピールする。

その懸命な事さえ、今の私には欠落している。

「ところで吉乃さん、結婚したって聞いたんですけど、本当ですか？」

ざわり、と、何かが総毛だったような気がした。
多分、それは嫉妬だったのだと思う。

小さな子供を抱きながら、私の近況を聞いてくる冬子ちゃんを、ほんの少し妬ましかったけれど、私はゆっくりと頷き、自嘲の笑みを浮かべた。

「結婚はしたわ。けど、夫婦間の営みは無いわ。これは内緒だけど、時期を見て離婚するつもり。残された時間くらい、自由に使いたいじゃない？」

お酒の力を借り、口にした言葉は、涙に濡れていた。

（理由なんて、考えるまで無かったわね・・・。）

だからこそ、今の私にはお酒と類が必要だった。

「怖い、類。私、あと、1年位しか生きられないかもしれないんだって。なんで？どうして私なの？」

スキルス胃癌の可能性があるだなんて、言えなかった。

あの家族とは自分から絶縁し、智とは会話すらしていない。

あの人には、私なんかより、キレイで健康な人が相応しい。

（子供も作れない私は、役立たずなの・・・。）

悲しい。

悔しい。

寂しい・・・。

いつから私はこんなにも弱くなってしまったのだろう。

「吉乃の悪い癖は、すぐに我慢するところだ。今日くらいは素直になれ。ほら、コレモ外して。」

自然な動作で、あの結婚指輪を外され、バレッタも外された。

たったそれだけ。

たったそれなのに、私は素直に泣く事が出来た。

肩を震わせ、想いのまま嗚咽を漏らし泣く私は、とても26歳の大人には見えなかっただろう。

ただ、ただ、悲しくて、寂しくて。

髪を優しく撫でてくれる手が、あの人じゃない事も、少しだけ哀しくて。

「なあ、吉乃。お前はもう誰が一番好きか判ってるはずだ。だからそんなに辛いんだよ。仕方ないよな。好きなのに諦めなきゃなんないんだからさ。」

私を諭すかの様に話す類は、私が何を思っているのかを全て理解した上で、傍にいてくれる。

泣いて泣いて。

漸く涙が止まった時、時間は既に深夜の2時を過ぎていた。

「お。やっと泣き止んだな。もう大丈夫か？今日も仕事だし、そろそろ帰るか。」

ウイスキーグラスを片手に、穏やかに微笑む類を見上げ、私は涙を袖で拭って水を飲み干した。

少しだけ吐き気がしたけど、それは知らないフリをした。

「今日はありがとう、類。夏紀ちゃんにもお礼言つといて。」

「ああ、アイツも喜ぶよ。何しろ、俺と結婚する理由も吉乃が好きだからだしな。」

類の苦り切った愚痴を笑って聞き流し、私達はそこで別れた。

結婚指輪とバレッタを、昔の馴染みの店に忘れた事さえ気付かずに。

家に辿り着いた時、リビングから灯りが漏れていたけど、私は何も考えずに家に入り、そして驚いた。

リビングには、顔色の悪い智がいた。

ビールを飲んだのか、リビングにはビールの缶が散乱していた。

「まだ起きてたんですか？珍しいですね……。」

部屋中に散乱している缶を拾いながら、何気なく話し掛けた私は、違和感を感じて、指を見た。

（なに・・・？）

おかしい。

何かが足りない様な気がする。

そして、はつとし、疑問はすぐに解けた。

他ならぬあの人の言葉によって。

「お前こそ珍しいな、こんな時間まで。」

確かにいつもより大分遅い帰宅時間だった。

「指輪もしないで、誰といった事やら……。」

（そうよ、指輪よっ！！）

その言葉で、私は羽織っていた薄手のコートのポケットの中に手を入れたり、鞆の中を探ったりした。

鞆を探った時、密かに役所から貰って、既に記入済みの離婚届が鞆の中でグシャグシャに丸まってしまったけど、その時の私は、とにかく指輪を優先して、探していた。

そして、店に忘れた事を思い出した時、私は迷わなかった。

（確か、あの店はまだ開いてるはず……。）

拾い集めていた缶を放置し、私は真夜中の外へと飛び出して行った。

ごめんね。智・・・。

あの時、一度でもアナタの浮かべた辛そうな表情を見ていれば、私は間違った判断を下す様な事をしなかったと思う。

けど、その時の私は、指輪が心配で、まさかあの人が、智が、私を酷く切ない表情を浮かべて見つめている事も知らず、再び夜の街へと消えていった。

、 5 離婚届（前書き）

色々変つてと思いますが、大筋は変わりませんので、変でしたら、こっそり（あくまで、優しくお願いします。）教えてください。

、5 離婚届

初めて智と逢った時、私は虞と同時に強い恋心を抱いたのだと、今なら素直に思える。

だからこそ、私は心に何重にも鍵を掛けた。

決して傷付かないように、期待しないように、と。

けれど、その心の鍵は既にボロボロに錆び、限界を迎え、朽ち果てる寸前だった。

ならば、残された道は、選ぶ道は一つしかなかった。

したくもない決断を、私は「あの人の為に」、と、下して、逃げた。

テーブルには、温かいご飯と、あの人が好きそうな料理。

好きそう、というのは、この三年間、ろくに会話すらしていなかったから、好きな食べ物や好みが判らないから。

同じ家に暮らしながら、会話らしい会話は殆どしなかった。

（これで夫婦だなんて・・・。）

それも今日で終わりだと思えば、少し寂しい。

その為に、今日は会社側に無理を言って休み、一日を掛けて私物

をまとめ上げ、私が住んでいた痕跡を綺麗に消した。

最後の仕上げに、私は少しだけ化粧をして、あの人を出迎える。

「お帰りなさい、智さん。」

出来る限りの笑顔を浮かべ、仕事から帰ってきたあの人を、智を迎えた。

おそらく結婚式以来の微笑みで、私は智を見上げていたのだろう。

「お仕事お疲れさまでした」

普段とは異なる私の態度に、智はじつくりと観察し、まるで壊れ物を扱うかのように抱きしめてくれた。

存在を確かめつつ、そして、決して離さないという意識が伝わってくるような、温かい抱擁。

その抱擁は、私が病気を知る前だったのなら、素直に受け入れられていた。

でも、もう私は知ってしまった。

（もう、過去には戻れない・・・。）

愚かにも、勝手に抱き返そうと動き出していた手を、ギリギリのところで抑え、智の肩にかけ、やんわりと突き放す。

「吉乃・・・？」

ここで疑問を持たない人間なんて、誰もいない。
智だって気付いてる。
それでも私は辞めない。

「ねえ、智さん。私の事、少しだけでも愛してくれてる？」

（私は、狡い。）

憎んでくれてもいい。
いや、憎んでほしい。

解っていても、どうしてもこの手を使わずにはいらなかった私を。

（ごめんね、貴方は最初から優しくかったのに。最初から最後まで・・・）

身体を重ねなかったのは、私が初夜の日にフラッシュバックを起こして拒否したり、体調が優れなかったから。

それを私達の中に愛がないと勝手に決め付け、すり替えたのは他ならぬ私。

「智さん、離婚して下さい。」

この言葉は、私から貴方への、最初で最後の愛の言葉。

「愛してるなら、私と別れて下さい・・・。」

心の奥底では、別れたくないと泣き叫んではいるけど。

これは貴方の、智の為だから。

「私、好きな人ができたんです。お腹に、その人との子供もいます。彼となら、私、幸せになれるような気がするんです。」

極上ともいえる微笑みを、必死に作って、浮かべた。

その必死な一世一代の演技は見破られることも無く、相手を確実に傷付けた。

どれだけ時間が経った頃だろうか。

智が出した答えは、私を驚かせ、そして安堵もさせ、少しだけ狼狽させた。

「吉乃、別れるも何も、俺達は最初から夫婦でもない。だから勝手にしろ。」

（今、何て言ったの？最初から夫婦じゃなかった？）

「お前と夫婦だった事など一日たりともない。目障りだ。さっさと出て行け。」

苛烈な怒りと言葉。

その言葉が、声が、私を徐々に支配し、そして、最後に私の表情を完全に支配した。

心とは正反対の、とても穏やかで、幸せを掴んだような微笑みと口調で、私は別れの言葉を口にした。

「今日まで一緒にいて下さり、ありがとうございました。いつまでもお元気で。幸せになって下さい。」

頭を下げ、スタスタと寝室に荷物を取りに行き、一応、記入済みの離婚届をダイニングテーブルに置き、私は智に真実も行き先も告げずに、家を出た。

外は雨が降っていたけれど、それは今になって溢れ出した涙を隠すには、都合が良かった。

まるで、お風呂の浴槽が引っくり返された力のような、激しい雨に打たれながら歩き、私が辿り着いた場所は、つい先日、運び込まれたばかりの罹りつけの病院だった。

緊急搬送口兼入り口に、びしょ濡れ姿で現れた私を見つけるなり、その場に偶然居合わせた看護師さんは、私の傍まで走ってきた。

「菜々宮さん？こんな時間にどうされたんですか？」

（驚くのも、無理ないわよね・・・。）

ただでさえ、診察時間は過ぎているというのに、更に私は大きな鞆を持っている。

「まさか、入院しに来たの・・・？」

信じられない、と、その声は感情を伝えていた。

私はその言葉を肯定するようにゆっくりと頷き、決意を込めた、

しつかりとした声で返事をした。

「よろしくお願いします。もう、身体中が痛くて、我慢できないんです。」

大切なものは全て捨ててきた。
だから私はもう、何も怖くない・・・。

、5 離婚届（後書き）

一端、区切ります。

次回、短いからです。

、 6 別れた姉の真実（前書き）

今回は利依さん視点です。

、 6 別れた姉の真実

私、綾橋 あやはし 利依 りい、27歳。

私には少し年の離れた兄さんがいる。
その兄さんの様子が、最近どこかおかしい。

急に実家に帰ってきたかと思えば、新築して3年しか経ってないマイホームを売ったり、（これはお父様が内々に買い取った。）得意でもないお酒に手を出してみたり。

そして一番おかしいのは、あの義姉さんを手放した事。

あらゆる手段や伝手を駆使して結婚したのに、どうして離婚したのだろう。

兄さんは義姉さんが浮気して、別れて欲しいと言われたから、別れてやったと言っているけど。

だけどね？

（そんな事、信じられる訳ないでしょ！？）

確かに兄さんは無愛想で誤解されやすい人だけど、本当はとても繊細で孤独で、誰よりも脆い人。

小さな頃から宗一兄さん そういちと常に比べられ、綾橋の帝王学を叩き込まれ、完璧を求められてきた兄さん。

そんな兄さんに近づいてくる人達は、みんな綾橋の財産と名前、兄さんの容姿だけが目的だった。

兄さんもそれを知っていたから、ある時期から女性とは付き合いはしても、結婚だけは絶対しようとしなかった。

その兄さんが3年前、日本に帰国して少したった頃、初めて私達家族に結婚しても良いと、一人の女性の写真を見せてくれた。

泣き黒子が印象的な、大人しく、儚く、穏やかに微笑む可愛い女性^トだった。

それが今回浮気して、兄さんの所から去っていった義姉さん、菜々宮 吉乃さん。

義姉さんは私より一つ年下だったけど、兄さんを良く支えてくれていた。

お父様やお母様さえ知らない、食の好みも完全に把握していた。兄さんも義姉さんを本当に愛してた。

兄さんと義姉さんは、私の理想の夫婦像だった。

（なのに、どうして？どうしてなの？義姉さん。）

兄さんが急に家に帰ってきた日、兄さんは離婚届を手に持っていた。

そしてその夜、私達家族は驚きのあまり、氷の様に固まってしまった。

あの、何が起きようとも決して表情を崩さない、見せない兄さん、

一部の人達からは冷酷とさえ言われている兄さんが、肩を震わせ、涙を流し、私達家族の前で泣いたのだから。

（義姉さん、どうしてなの？兄さんのどこが悪かったの？）

兄さんの事で、これ程驚いたのは、この時が初めてだった。

兄さんの初恋は、間違いなく義姉さんである、吉乃さん。

兄さんは、その初恋の相手である義姉さんから離婚届を突き付けられた。

（辛いよね・・・、これは。泣くしかないかも。）

でも、驚くのはまだ早かった。

兄さんも変な所で人が良いのか、単純なのか、夢見がちなのか、籍も入れてなかったと、これまた爆弾発言をしてくれた。

兄さん曰く、

『本当に信頼してもらえ、許して貰えたら、籍を入れるつもりだった』

（兄さん、今時、そんな人何処にもいないから！！）

その日から、兄さんの感情や表情から「笑顔」や、「微笑み」、「喜び」は消え、昔の蠟人形みたいな、冷たい、温もりの欠片も感

じられない兄さんになってしまった。

*

私がある日、その病院にいたのは、不眠症になってしまった兄さんの為に、仕事で忙しい兄さんに頼まれ、代わりに眠剤を貰いに来っていたからだった。

だけど、私はその日の偶然を、後になって深く感謝した。

（どれだけ待たせんのよ！！予約時間過ぎちゃってるじゃない！！）

苛々と診察室の待合室で待っていた私の耳に入ってきたのは、ここには居るはずのない人の声と名前。

「菜々宮さん、本当にご家族には連絡できないんですか？これは貴女の命にかかわる重要な事なんですよ？」

「…………、良いんです。私には家族なんていませんから。」

「菜々宮さんっ！！」

（ウソ、でしょ？どうして義姉さんが・・・？）

兄さんは義姉さんが浮気して、出っ行ってたといっていた。なのに、どうしてここにその『義姉さん』がいて、声がするのだろうか。

私が何も出来ないでいる間にも、義姉さんの苦しそうな声は響い

ていた。

（義姉さんが消えて、兄さんと別れて今日で二週間。）

「もう、放っておいて下さい。私の命は私のだけのもの。私が死んだって、誰も悲しんだりしないわ!!」

廊下にまで良く響く声は、どんなに願っても、間違いなく義姉さんの、弱々しく、悲しい色が混ざり合ったものだった。

「まただわ。」

「ええ。でも、あの子も可哀想な子ね。よりによって進行性の癌だなんて……。」

――もう、手術も手遅れなんですって。

勝手な事を言わないで欲しかった。

（義姉さんも義姉さんよ!!）

ヒソヒソと囁き合う他の人達の言葉が、何よりも義姉さんの言葉が、私の胸を深く抉り、斬りつけ、傷付けた。

（迷ってる暇なんて、迷う必要なんで、ないわ。）

私は兄さんの眠剤も受け取らず、急いで家へ帰った。

今ならまだ間に合うかもしれない。

それは根拠も理由もない、ただの勘だった。
けれど、私はその勘を、不思議と外れる事がないと、確信していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9895x/>

Si je tombe dans l'amour avec vous

2011年11月4日16時23分発行